

〔課題演習報告〕

小学校からの「荒れ」の予防に関する研究
—中学校区の3小学校におけるSEL-8Sプログラムの共同実施を通して—

泉 徳 明

Noriaki IZUMI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース
北九州市立足立小学校

(2017年1月6日受理)

本研究では、SEL-8Sプログラムの小学校における「荒れ」の予防に関する効果を検証した。研究Ⅰでは、教育委員会等による社会的能力を育成するプログラム（計46実践）のわが国全体の傾向を分析し、小学校からの導入や複数校種を視野に入れた実施、生徒指導上の諸問題との関連等を明らかにした。研究Ⅱでは、SEL-8Sプログラムを1小学校で試行した。その結果、短期間での児童自己評定の向上は難しく、継続的な実践が必要であること、時数確保と担任教師へのサポートによる授業の質向上を図る必要があることなどが課題として残った。研究Ⅲでは、SEL-8Sプログラムの実施を1中学校区の3小学校に拡張し、学校連携の在り方と教育効果の検討を行った。組織づくり、推進担当者会の実施、職員研修の充実、プログラムのユニット構成表の作成、モジュール・プログラムの試行、教師への半構造化面接の実施等の取組を行うことにより、3校で確実なプログラム実践が行われるとともに、児童自己評定の向上にも明確な成果が表れた。

キーワード：荒れ、SEL-8Sプログラム、子どもつながりプログラム、予防・開発的、学校連携

1 問題と目的

(1)はじめに

学校における「荒れ」とは、子どもたちの攻撃行動によってもたらされる、学校・学級規範への逸脱ならびに教師の教育活動の機能不全の状態である（松浦・中川，1998）。A小学校のある北九州市においても、学校現場で暴力行為、不登校、いじめ等の課題が見られ、対人関係能力の低下がその主な要因として考えられている（北九州市，2015）。その対策として、平成19年度より実験校における「対人スキルアップ学習」、平成24年度より小中9年間の「対人スキルアッププログラム」の実践研究が行われた。平成27年度からは、「北九州市子どもの未来をひらく教育プラン」後期計画により、小・中学校において全市一斉の「北九州市対人スキルアッププログラム（名称：北九州子どもつながりプログラム）」が実施され、各校での実践の充実が求められているところである。

A小学校は北九州市の繁華街に近く、校区には商業施設や娯楽施設が並んでいる。全校児童数

187人、8学級の小規模校である。近年、高学年に「荒れ」が見られ、授業妨害や備品の破損などが生じた。複数の教師による指導や家庭との連携の充実などで学級は安定していったが、低学年からの系統的な予防プログラム実施の必要性が感じられる出来事であった。また、A小を含めた中学校区の各学校の実態は、学力、家庭・地域環境等類似した点が多く、共通の課題意識の下で人権学習を中心に連携を行っているが、児童・生徒や教職員の交流は十分行われているとは言い難い。

(2)SEL-8Sプログラム

「SEL-8S (Social and Emotional Learning of 8 abilities at School) プログラム (以下、SEL-8S)」とは、「学校における8つの社会的能力育成のための社会性と情動の学習」と訳される、予防・開発的学習プログラムのことである（表1）。現在、学校で行われている種々の予防・開発的な取組を一定の共通の枠組みの中で整理して全体の統一性を図り（図1）、より効果的な指導を目指している。北九州市子どもつながりプログラムにも多くの学習指導内容が用いられている。

表1 SEL-8S でめざす 8 つの社会的能力

基礎的な 社会的能力	①自己への気づき
	②他者への気づき
	③自己のコントロール
	④対人関係
	⑤責任ある意思決定
応用的な 社会的能力	⑥生活上の問題防止のスキル
	⑦人生の重要事項に対処する能力
	⑧積極的・貢献的な奉仕活動

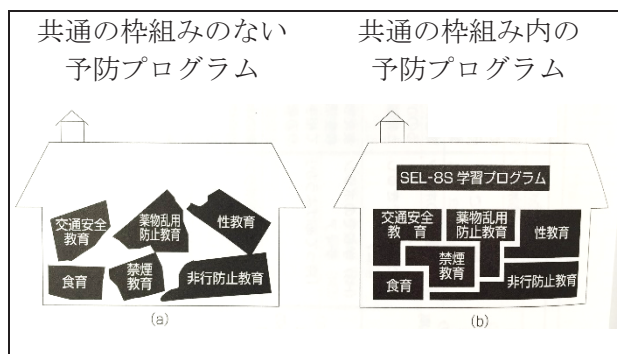


図1 SEL-8S プログラムとさまざまな予防・開発的取組との関係（小泉・山田，2011）

前述したような「荒れ」を小学校段階から予防し、学校・学級の安定を図っていくことは、児童の心身の安定と学力の向上につながる重要な役割を果たすものである。そこで本研究では、研究Ⅰとして、社会的能力を育成するプログラムのわが国全体の傾向を明らかにする。研究Ⅱとして、A小学校においてSEL-8Sを試行し、その効果を検証する。そして研究Ⅲとして、SEL-8Sの実施を1中学校区の3小学校に拡張し、SEL-8Sを活用した学校連携の在り方と教育効果を検討する。以上のような研究を通して、SEL-8Sの小学校段階からの「荒れ」の予防に関する効果を検証する。

2 研究Ⅰ

(1)目的

47都道府県および20政令指定都市の教育委員会および教育センターで公開されている社会的能力を育成するプログラムや予防・開発的な教育活動を分析し、わが国全体の傾向と今後に期待されることを明らかにする。

(2)方法

研究期間 平成27年6月～平成27年9月

学習プログラムの収集

47都道府県及び20政令指定都市の教育委員会及び教育センターのホームページを参照した。まず、各サイトを順に検索し、学習プログラムに関

わる情報を収集した。次に、検索の精度を上げるために、検索サイトGoogle(<http://www.Google.co.jp>)を利用し、都道府県名（政令指定都市名）（例、「福岡県」「北九州市」）に加えて「生徒指導」「教育相談」「社会性と情動」「社会的スキル」「プログラム」の語句で検索を行い、より多くの情報を収集できるように試みた。

検索の候補に挙がったプログラムの中から、予防・開発的な内容であることを基準に選定を行った。その際、①年間計画、②指導案、③効果測定、④成果報告のうち、少なくとも一つ以上有するプログラムのみ選定し、名称のみなど具体的な内容が判断できないものは除外した。また、危機介入などに留まる実践も除外した。道徳やキャリア教育などについては、個別にその内容を精査し、実践内容が学習プログラムの内容に該当するかどうかを報告者が判断した。

学習プログラムの整理

①年間計画、②指導案、③効果測定、④成果報告については、その内容の具体性により3段階（よく示されているものを◎、ほぼ示されているものを○、示されていないものを△）で判定を行った（表2）。

①年間計画については、校種別または学年別のものが記載されていれば◎、特定の校種のみ、または作成上の留意点のみなどの場合は○とした。記載がないものについては△とした（△については、以下の②～④も同様）。②指導案については、校種別または学年別の指導案もしくは指導解説が記載されていれば◎とした。児童生徒用のワークシートのみや、指導案のない実践事例、また全体を通して1本しか記載がないもの、あるいは別冊資料（サイト上では内容が確認できないもの）については○とした。なお、掲載してある指導案の本数も記録した。③効果測定については、検査用紙と検査ツールが両方あるものを◎、検査用紙のみや検査項目のみのは○とした。④成果報告については、効果測定の結果や実践事例、成果と課題などが記載されているものを◎とした。○は使用しなかった。

(3)結果と考察

今後の実践及び研究の参考となるよう、㉞対象者・開始年度、㉟学習プログラムの目的、㊱学習プログラムの内容、㊲年間計画・指導案、㊳効果測定・成果報告についてまとめる。

対象者・開始年度

対象者を校種別に見ると、保育園1、幼稚園3、小学校43、中学校40、高等学校23、特別支援学校10となった（のべ数）。小学校での実践が最も多く、

表2 教育委員会等のホームページで公開されている社会性と情動の学習プログラム等(抜粋)(泉・小泉, 2015)

番号	都道府県(政令市)	プログラム名	目標	内容	校種	年度	年間計画	年間計画の具体的内容	指導案	指導案の具体的内容	指導案の掲載本数	効果測定	効果測定の具体的内容	成果報告	成果報告の具体的内容
1	北海道	いじめ未然防止モデルプログラム	いじめ防止	CSST	小中高	26年度~	○	月ごとの大枠	○	活動例(概要)	小/17 中/15 高/15 補足/6	×		○	指導事例報告
2	青森県	キャリアノート	意欲の喚起	キャリア教育	小中高	不明	△	プログラムと教育課程の関連表	△	ノートの記述例	小/16 中/12 高/12	△	ふりかえりワークシートのみ	×	
3	岩手県	いわて子どものこころのサポート	心とからだの変化や反応に対処するセルフケア	ストレスマネジメント	小中高	24年度~	×		○	具体案(小1~3、小4~6、中・高)スライド資料 図表資料	小1~3 /1 小4~6 /1 中・高/1	○	検査用紙 検査ツール	×	

低年齢のうちから予防・開発的な支援をしていこうとする各自治体のねらいが見えてくる。校種間の系統性を見てみると、小・中・高にわたって同一プログラムを実施しているものが22、小・中での実施が17、保・幼・小での実施が1、各校種別個の実施が6(小4, 中1, 高1)となり、複数の校種を視野に入れたプログラムが全体の約87%であることが明らかとなった。

学習プログラムの目的

学習プログラムの目的を内容別に分類すると、豊かな人間関係が12、夢や希望などの意欲が9、規範意識が8と続いた。豊かな人間関係が最も多く取り上げられているのは、文部科学省(2015)が暴力行為や不登校などの背景として述べている友人関係上の問題に対応したものと考えてよいであろう。また、夢や希望などの意欲に関しても、文部科学省(2015)が不安や無気力などを生徒指導上の諸問題の背景として述べていることから明らかである。

学習プログラムの内容

プログラムを内容別に分類すると、SST(ソーシャルスキルトレーニング 学級単位のものを含む)が18と最も多かった。生徒指導提要(文部科学省, 2010)によると、SSTは「仲間関係においてトラブルを起こしやすい児童が適切な仲間とのやりとりを学ぶ社会的技能訓練」と説明されている。また、その目標として「相手を理解する」「自分の思いや考えを適切に伝える」「人間関係を円滑にする」「問題を解決する」「集団行動に参加する」ことが述べられており、生徒指導上の諸問題との関連性が明確である点が、多く採用されている理由であろう。

年間計画・指導案

年間計画を◎と判定したものは11、○と判定したものは13であった。指導案を◎と判定したものは12、○と判定したものは21であった。年間計画と指導案のどちらも◎と判定したプログラムは9件で、掲載されている指導案の本数も多く(平均47本)、参考となる情報が豊富である。

効果測定・成果報告

効果測定を◎と判定したものは6、○は8であった。◎と判定したのものには、具体的な検査項目が分かる検査用紙と、一定の尺度の下で判定が可能な検査ツールが記載されており、すぐに用いることができるようになっている。成果報告を◎と判定したものは17であった。プログラムの実施によって児童生徒がどのように変容したのかを数値で示すことで、成果をより客観的に見ることができると。その点で、今後はプログラム内容に応じた適切な効果測定法の開発と、その成果報告の積極的な公開が望まれる(泉・小泉, 2015)。

3 研究Ⅱ

(1)目的

SEL-8Sを試行し、A小学校における「荒れ」の予防に関する効果を検証する。

(2)方法

研究期間 平成27年6月~平成28年2月

対象

北九州市立A小学校の3年生以上の児童(3年生から順に、28名, 24名, 27名, 30名)を対象とする。

効果測定

ア)小学生用 SEL-8S 自己評定尺度

3年生以上の児童を対象に実施する。8つの社会的能力(表1参照)についてそれぞれ3項目(4段階)で自己評定を行う。個人の結果は、同学年の平均点・標準偏差をもとに算出した偏差値やレーダーチャートで表される。

イ) SEL-8S 教師による評定

4・5年生の担任を対象に実施する。8つの社会的能力について、児童一人一人に対して「1. 当てはまらない」から「5. 当てはまる」までの5段階で評定を行う。児童の自己評定尺度と同様に偏差値やレーダーチャートで個人の結果が表示される。自己評定尺度と教師による評定を重ねて表示し、認識のずれを明らかにすることができる(図2)。

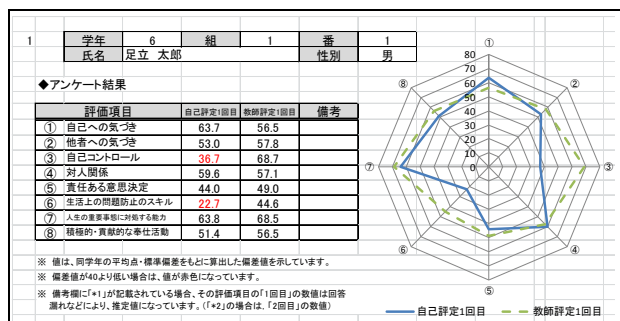


図2 評定のレーダーチャート

表3 実施計画

時期	実施内容
6月17日	・職員研修①(実施計画案)
7月	・小学生用自己評定尺度1回目 ・教師による評定1回目
9月2日	・職員研修②(SEL-8Sの概要)
9月下旬	・職員研修③(アンケート分析結果, 具体的な実施内容・回数・時期)
10・11月	・全学級授業実践(2回 T1: 泉 T2: 担任)
12月	・小学生用自己評定尺度2回目 ・教師による評定2回目
1月	・次年度の計画案作成
1・2月	・全学級授業実践(2回 T1: 担任 T2: 泉)
2月	・小学生用自己評定尺度3回目 ・職員研修④(アンケート分析結果, 実践のまとめ, 次年度の計画)

表4 実施したSEL-8Sプログラム

学年	時期	SEL-8Sプログラム
3年	10月	こころの信号機
	11月	イライラよ, さようなら
	1月	おはよう, こんにちは, さようなら
	2月	しっかり聞こう
4年	10月	自分はどんな気持ち?
	11月	こころの信号機
	1月	しっかり聞こう
	2月	もうすぐ5年生
5年	10月	こころの信号機
	11月	断る方法いろいろ
	1月	リラックスして
	2月	相手はどんな気持ち?
6年	10月	断る方法いろいろ
	11月	相手はどんな気持ち?
	1月	わたしの対処法
	2月	いよいよ中学生

実施計画

実施計画は表3に示す通りである。

実施方法

ア) 職員研修

表5 北九州市対人スキルアッププログラムとSEL-8Sの対応表(抜粋)

1学期		
(ねらい) 主として, 新しい学級の中で, 安心できる学級づくりをねらう		
	北九州市対人スキルアッププログラム	SEL-8Sプログラム
3年生	こんな方法があるよ ～ストレスマネジメント～	E2 イライラよ, さようなら E3 こんな方法があるよ
	おはよう, こんにちは, さ ようなら	A5 おはよう, こんにちは, さようなら
4年生	こんな方法があるよ ～ストレスマネジメント～	E2 イライラよ, さようなら E3 こんな方法があるよ
	ともだちのいいところを みつけよう	C3 じょうずだね
	しっかり聞こう(うめのかさ)	B4 しっかり聞こう

職員研修①では, 研究の目的, SEL-8Sの内容例, 調査内容(アンケート), 実施計画などについて説明し, 研究の概要を明らかにした。研究の名称を「A 小学校子どもつながりプログラム」とし, 職員が自校の課題に向き合おうとする意識がもてるように, また, 北九州市の施策との関連性をとらえることができるように配慮した。

研修②では, 福岡教育大学 小泉令三教授を講師として, SEL-8Sの概要について研修を行った。SEL-8S作成の背景やこれまでの実施例, 実践による効果などについて, 具体的に職員が理解した上で, A小学校での実践につなげていくようにした。

研修③④では, 児童および教師による評定(アンケート)内容を分析した結果や, 今後の実践の見通しなどについて説明を行った。

イ) アンケート実施

表3に示す通り, 小学生用自己評定尺度を3回, 教師による評定を2回実施した。

ウ) 授業実践

実践は, 学級活動(2)の時間を利用し, 2学期に2回, 3学期に2回の計4回実施した(表4)。内容は, 北九州子どもつながりプログラムとSEL-8Sの対応表(表5)を参考に, 児童の実態に応じて担任と報告者で相談して決定した。2学期には, T1を報告者, T2を担任として授業を行い, SEL-8Sのねらいや授業の内容・方法について担任の理解を促した。また, 掲示物などを工夫したコーナーを設置して, 職員および児童がSEL-8Sについて意識することのできる環境を整備した。3学期には, T1を担任, T2を報告者とした体制へと変化させ, 担任による授業実践を進めた。実践ごとに「子どもつながりプログラム通信」を発行し, どの学級がどのような学習を行っているか全体で理解を深めたり, 各担任による主体的な実践が進んだりしていくように働きかけを行った。

表6 小学生用 SEL-8S 自己評定尺度の平均値と SD の変容および分散分析の結果

学年	n	1回目(7月)	2回目(12月)	3回目(2月)	F値	df	下位検定
3年	28	50.91(8.69)	48.54(9.47)	51.35(6.82)	1.79	54	
4年	24	49.79(6.01)	47.04(6.80)	46.96(6.98)	2.67 +	46	1回目>3回目
5年	27	49.79(5.23)	50.95(5.77)	48.26(7.75)	3.41 *	52	2回目>3回目
6年	30	49.76(4.89)	51.63(6.05)	52.38(5.57)	16.05 ****	58	2・3回目>1回目

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

表7 SEL-8S 教師による評定の平均値と SD の変容および t 検定の結果

学年	n	7月	12月	t値	df
4年	24	45.70(8.47)	44.70(5.65)	0.28	23
5年	27	49.46(7.88)	49.75(5.97)	0.48	26

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005

(3)結果と考察

小学生用自己評定尺度および教師による評定について、偏差値(平均=50)をもとに平均値と標準偏差を算出した。学年ごとに、児童による評定では分散分析、教師による評定では t 検定を行った。結果を表6と表7に示す。

小学生用自己評定尺度では、6年生は1回目と比較すると2・3回目のどちらも有意に高かった。一方、3年生には有意差は見られなかった。4年生は3回目の得点が1回目より低くなる傾向が見られた。5年生についても、2回目から3回目に有意な得点の低下が見られた。教師による評定では、4・5年生ともに有意差は見られなかった。

6年生は、担任教師が授業参観でSEL-8Sを実施するなど実践に意欲的だったことや、5年生からの持ち上がりで落ち着いた環境にあったため有意に上昇したと考えられる。一方、4・5年生は二次的支援の必要な児童が多く、4回のプログラム実施では十分にその効果が浸透しなかった可能性がある。

以上のように、4回のプログラム実施により自己評定の得点が向上した学年(6年)がある一方で、変化が見られない学年や得点が低下した学年が多く、短期間での自己評定の向上が難しいことが明らかとなった。どの学年でも児童に確実な変容が見られるように、今後も継続的な授業実践を行っていくことが必要である。また、担任教師へのサポートも同時に行い、時数確保と授業の質の向上を図っていく必要性も感じられた。

4 研究Ⅲ

(1)目的

SEL-8Sの実施を1中学校区の3小学校に拡張し、SEL-8Sを活用した学校連携の在り方と教育効果を検討する。

(2)方法

研究期間 平成28年1月～平成29年2月

対象

北九州市立X中学校区の3小学校の全学年の通常学級全児童を対象とする。児童数は、A小学校187名、B小学校475名、C小学校259名である(いずれも平成28年1月現在)。

効果測定

ア)小学生用SEL-8S自己評定尺度

3年生以上の児童を対象に実施する。

イ)教師アンケート

全学級の担任及びSEL-8S推進担当者を対象に実施する。プログラムの効果について、「1.全く思わない」から「5.とてもそう思う」までの5段階で評定を行う。また、自由記述欄を設けて連携に関する教師の意見・感想を尋ねる。

実施計画

実施計画は表8に示す通りである。

実施方法

ア)連携のための組織づくり

実践に先立ち、3校の校長が集まる場を設定し、報告者が研究の概要を説明した。そこでは、「教師や子どもが負担を感じないプログラム構成を」という意見や、「教育課程にどう位置づけるのか」という疑問が出された。また、「各校の推進者は誰が担うのか」「短時間で行うショートプログラムの方が導入しやすい」「単年ではなく今後も発展・継続して取り組めるものに」など、連携に向けた具体的な質疑がなされた。そこで、3校でプログラム実施の目的を共有すること、内容・実施回数は北九州子どもつながりプログラムに沿ったものにする、小学生用SEL-8S自己評定尺度により児童の変容を見取ることを確認し、各校長の理解を得た。

次に、X中学校区人権教育推進担当者会(1中3小学校の人権教育担当者4名が参加)において、各小学校の担当者に連携の協力を求めた。その結果、人権教育担当者がSEL-8Sの実施を担い、そのサポートを報告者が行うこととなった。また、本プログラムをX中学校区人権教育推進協議会の事業として推進し、3小学校における確実なプログラム実施が行われるようにした。

表 8 学校連携の実施計画

時 期	実 施 内 容
28年 1～3月	・3校校長への趣旨説明 ・X中学校区人権教育推進担当者との打ち合わせ
4月	・3校校長への研究計画説明・協力依頼 ・人権担当者会での研究計画説明・協力依頼
5月	・小学生用自己評定尺度1回目(A小)
5・6月	・職員研修①(各校における理論研修, アンケート分析結果の活用方法)
5～7月	・授業実践(複数回)
7月	・小学生用自己評定尺度1回目(B・C小) ・職員研修②(4校合同人権研修会 講師…小泉令三教授)
9～12月	・授業実践(複数回)
11月	・職員研修③(4校合同授業研修会 授業公開…B小学校)
12月	・小学生用自己評定尺度2回目
1・2月	・授業実践(複数回)
2月	・小学生用自己評定尺度3回目 ・職員研修④(各校での研修 アンケート分析結果, 実践のまとめ) ・次年度の計画案作成
3月	・次年度担当者への引き継ぎ
毎月	・推進担当者会
随時	・授業づくり支援

表 9 職員研修②の教師の感想(抜粋)

○今日聞いた話はこの地域の子どもに必要なことだと強く感じた。SEL-8Sで様々な社会的能力をつけ、学力の基盤を固めることを学級経営の視点として取り入れたい。
○SEL-8Sの話聞いてとても参考になった。ぜひ実践していきたい。「心の信号機」は低学年だけでなく高学年でも非常に有効だと思う。この夏休みに実践計画を立てて準備をし、2学期に臨みたい。

表 10 職員研修③の教師の感想(抜粋)

○子どもたちが落ち着いて意欲的に取り組んでいた。トラブルの解決法は一人一人違って、どれがベストかは決められない。ベストアンサーを話し合い、考えて、見つけていくことができるようになってほしいと感じた。
○今の子どもたちは、「あいさつ」「感謝の言葉」「素直に間違いを認める」「相手の気持ちを考える」など、当たり前に出ると思っていることがなかなか出ていないという状況があるので、SEL-8Sの活動を通して体験、実践することが必要と思う。

職員研修②(28年7月実施)では、4校合同人権研修会を行った。福岡教育大学 小泉令三教授を講師に、SEL-8Sの実践事例、ロールプレイの実際、実践による成果等、実践的・具体的な説明を行い、各校の教員に理解を促した。講演後には分散会も行われ、参加者からはこれまでの実践内容の紹介や今後の実践への意欲等(表9)も出された。2学期以降の実践の充実が予想される研修会となった。

職員研修③(28年11月)では、SEL-8Sを題材とした4校合同授業研修会を実施した。本年度は、B小学校による授業公開が行われ、全学級がSEL-8Sの授業を公開した。授業後には学年別の協議会が開かれ、プログラムの実施状況や子どもの実態に関わる情報交換が行われた。参加者の感想では、プログラムの意義に触れる記述が並び、教師の意識が高まってきていることが感じられた(表10)。

職員研修④(29年2・3月)では、各校の推進担当者により実践のまとめを行う。本研究による取組が今後も継続していくように、推進担当者の引き継ぎを視野に入れながら他の推進担当者と協働して実践のまとめを行っていくようにする。

エ) SEL-8S ユニット構成表の作成

児童の課題に応じたプログラムを各校で選択できるように、8つの社会的能力と各学年のプログラムの関連が明確となるユニット構成表を作成した(表11・12)。これらを基に各校でプログラムを決定し、全学年でA小学校では1・2学期に4回、B小学校では2学期に5回、C小学校では2学期に2回プログラムを実施した(表13)。

平成28年度 X中学校区(小学校)「子どもつながりプログラム」実施計画(案)
X中学校区人権教育推進協議会

1. 目的
○ SEL-8Sプログラムをベースとした「北九州子どもつながりプログラム」の実施を通して、児童の社会的能力を高め、規範意識を高めることができるようにする。
○ 中学校進学を見据え、3小学校が共同でプログラムを実施して、校区のすべての児童に着実に規範意識を積み上げていくことができるようにする。

2. SEL-8S プログラムとは
SEL-8S(Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School)とは、8つの社会的能力の育成を旨とした予防・開発的な学習プログラムのことである。現在、学校で行われている種々の予防・開発的な取組(交通安全教育・薬物乱用防止教育・性教育・食育・非行防止教育など)を一定の共通の枠組みの中で整理することによって全体の統一性を図り、より効果的な指導を目指している。「北九州子どもつながりプログラム」にも多く用いられている。

【SEL-8Sでめざす8つの社会的能力】	
基礎的な社会的能力	①自己への気づき
	②他者への気づき
	③自己のコントロール
	④対人関係
応用的な社会的能力	⑤責任ある意思決定
	⑥生活上の問題防止のスキル
	⑦人生の重要事項に対処する能力
	⑧積極的・貢献的な奉仕活動

図 3 職員研修①の提案文書(抜粋)

イ) 推進担当者会の実施

月に2回実施される人権担当者会のうち1回をSEL-8Sの情報交換会として位置づけ、カリキュラムの作成や修正、各校の実践内容の交流などを行うようにした。また、各校における具体的なプログラム内容の決定や、小学生用SEL-8S自己評定尺度の実施・データ入力・分析の際には報告者が各校に行き、円滑な実施に向けた支援を行った。

ウ) 職員研修の充実

職員研修①(28年5・6月実施)では、SEL-8Sの効果、評定の活用法、北九州子どもつながりプログラムとの関連性などについて、各校で理論研修を行った。その際、報告者がX中学校区人権教育推進協議会の担当者として提案を行った(図3)。

表 11 学年別のユニット構成 (抜粋)

A 基本的 生活習慣	おはようございます (北九州) (SEL-8S) あいさつのポイント「おかめ」	
	①大きな声ではっきりと ○ロールプレイを通して、あいさつされた時の気持ちを体験的に味わわせる。 ○「おはようございます」ゲームであいさつの自己点検をして、気持ちの良いあいさつのポイントについて体験的に理解する。	②体を起こして ③目を見て ①いろいろなあいさつの仕方から、どのようなあいさつをすればよいか考える。 ②あいさつのポイントを知る。 ③あいさつのポイントを押さえたあいさつをする。

表 12 ユニット構成一覧表 (抜粋)

	A 基本的生活習慣	B 自己・他者への気づき、関心	C 伝える
1年生	★チャイムの合図	◇★いろんなきもち ◇いいところみつけをしよう ◇うさぎさんはききょうず	◇あったかことばをふやそう ◇タッチングゲーム
2年生	◇★おはようございます ★自分のもちもの ★何でも食べよう	◇★いろんなきもち ★おこっているわたし ◇名前ビンゴゲーム ◇そうだねゲーム	◇あたたかい言葉かけをしよう ★とてもうれしい! ★“はい”と“いいえ”

表 13 実施した SEL-8S プログラム (6年生)

	学年	時期	SEL-8S プログラム
A 小	6年	6月	下級生のお世話
		7月	最高学年になって
		10月	トラブルの解決
		11月	同じ色でこんにちは
B 小	6年	9月	相手はどんな気持ち (モジュール)
		10月	下級生のお世話
		10月	わたしはしない (モジュール)
		11月	トラブルの解決
C 小	6年	11月	男の子と女の子 (モジュール)
		10月	リラックスして
		11月	トラブルの解決

オ) モジュール・プログラムの試行

A 小学校においてモジュール・プログラムを試行した (図 4)。10 分間の帯タイムを利用し、1 プログラムを 4 週に分けて実施した。推進担当者会において、B 小学校では 45 分間のプログラムとともにモジュール・プログラムによる授業実践を進めていくことが確認された。A 小学校における試行例をもとに、プログラムを分割した指導案を報告者が作成し、B 小学校において 2 学期に各学年 3 プログラムずつ実践が行われた。

カ) 教師への半構造化面接の実施

A 小学校での 1 学期の授業後、数名の教師に半構造化面接を行った。授業を行った感想、児童の変容、今後育てたい力について尋ね、教師から表 14 のような感想が出された。このような感想を述べた教師は、その後の実践をより意欲的に取り組んだ。面接により、教師の参画意識や効力感が増したと考える。そこで、12 月にフィードバックシートを用いて実践を担う教師にプログラムの効果を尋ねるアンケートを実施し、それをもとにした

2. 指導計画 (チャレンジタイム)						
1回目 (10分)	3/26	2回目 (15分)	6/2	3回目 (10分)	6/9	4回目 (10分) 6/16
3. 展開						
＜1回目＞ 下級生との関わりについてふりかえる活動						
学習活動			指導上の留意点			
1. めあてを確認する。 (1)スライドを見て、下級生と一緒に活動したことをふりかえる。 (2)これから卒業までの間に、下級生と関わる活動について考える。			○入学式や歓迎遠足などの写真を用意し、6年生になってからの活動をふりかえることができるようにする。 ○児童が発表した内容を板書する。 ○これから4回に分けて学習をしていくことを伝える。			
6年生として、下級生との関わり方を考えよう。						

図 4 モジュール・プログラムの指導案 (一部)

表 14 A 小の教師の感想 (抜粋)

○思っていた以上に、子どもが積極的にロールプレイをしたり考えたりした。子どもが楽しく学んでいる。 ○プログラム実施で、普段の生活では見えなかった子どもたちの実態が見えてきた。必要な学習だと感じた。 ○コミュニケーション能力を育てていきたい。学級の課題であるし、これからの社会の課題でもある。

表 15 半構造化面接による教師の言葉 (抜粋)

1. 社会性や人間関係能力を高める効果があるか。 ○学習した内容を実際に子どもが使っている。適切な時期に適切なプログラムを入れると効果がある。 ○子どもが言葉や行動の仕方を知らないから、トラブルになる。だからこの学習は必要である。
2. 生徒指導上の問題の減少につながるか。 ○落ち着いているときに実施する必要がある。荒れてからでは遅い。 ○ショートで継続して行ったり、プログラムを系統的に行ったりしていけば、問題は減っていくだろう。
3. 児童の日々の学校生活は、落ち着いてきたか。 ○この学習をしていなかったら、今よりもっと落ち着いていなかったかもしれない。 ○すぐには落ち着かない。カリキュラムに位置づけて、系統的に学習を行うことで落ち着いていこう。

面接を実施した (表 15)。プログラム実践の効果や児童の変容を教師が意識できるようにすることで、3 学期以降の教師の主体的な実践を促した。

(3)結果と考察

小学生用自己評定尺度について、平均を 50 とした偏差値をもとに平均値と標準偏差を算出し、学年ごとに t 検定を行った (表 16)。A 小学校では、全ての学年で得点が上昇し、特に 3・5・6 年生で有意であった。B 小学校では、全ての学年において得点が上昇したものの、いずれも有意ではなかった。C 小学校では、4・5 年生で上昇が、3・6 年生で下降が見られたが、いずれも有意ではなかった。

C 小学校は自己評定が向上した学年と低下した学年があり、A 小学校の研究Ⅱの結果 (表 6) と同様の傾向を示している。B 小学校も実施初年度であるが、2 学期に各学年とも 5 実践行っており (表 13)、プログラムの効果が見え始めていると考えられる。A 小学校では、昨年度からの継続的な実践により児童の変容が大きくなったと考えられる。

表 16 小学生用 SEL-8S 自己評定尺度の平均値と SD の変容および t 検定の結果

	学年	n	1 回目	2 回目	t 値	df
A 小	3 年	32	50.80(7.05)	53.41(6.78)	3.33***	31
	4 年	29	49.11(9.73)	49.71(8.69)	0.65	28
	5 年	23	49.16(5.78)	56.41(4.37)	7.45***	22
	6 年	28	47.38(7.67)	51.54(7.45)	2.20*	27
B 小	3 年	85	47.68(9.25)	48.03(8.98)	0.47	84
	4 年	62	51.69(8.91)	52.32(8.64)	0.74	61
	5 年	67	49.69(7.25)	50.49(6.18)	1.26	66
	6 年	74	47.34(9.03)	47.71(8.47)	0.49	73
C 小	3 年	43	49.79(8.44)	49.57(7.57)	0.23	42
	4 年	45	49.67(8.43)	50.42(8.62)	0.75	44
	5 年	37	48.32(6.32)	48.80(6.06)	0.60	36
	6 年	38	48.16(7.81)	47.58(9.37)	0.71	37

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .005$

表 17 「荒れ」の指標の推移

	項目	26 年度	27 年度	28 年度
A 小	ガラス破損	11	5	1
	通院(けが)	35	28	4
B 小	ガラス破損		3	1
	通院(けが)		27	20
C 小	ガラス破損		2	3
	通院(けが)		17	14

※28 年度は 12 月末日までの記録

表 18 教師アンケートの結果

質問項目 (5 件法)	A 小 12 名	B 小 22 名	C 小 14 名
社会性・人間関係能力の向上	4.6	4.4	4.7
生徒指導上の加害や被害の減少	3.8	3.9	4.3
学校生活の落ち着き	4.1	3.3	3.3

「荒れ」の指標として、ガラス破損枚数と通院数(けが)の年度ごとの変容を記録した(表 17)。児童自己評定の結果と同様に、A 小学校では大幅な減少が見られ、B・C 小学校においては現状維持の結果となった。この結果から、A 小学校においてはプログラム実施が「荒れ」の予防に効果的であったといえる。また、教師アンケートの結果から、学校生活の落ち着きについても A 小学校の教師は特に強く感じていることも分かった(表 18)。3 校ともに教師がプログラムによる社会性・人間関係能力の向上、生徒指導上の加害や被害の減少への効果を感じていることを鑑みると、プログラムの継続的な実施により、B・C 小学校においても今後児童自己評定の向上や「荒れ」の指標の減少等が見られることが予想される。来年度以降も実践を積み重ねていくことができるよう、各校校長の指導の下で組織運営と実践内容の充実を図っていく。

5 総合考察

本研究は、SEL-8S の「荒れ」の予防に関する効果の検証を目的に実施した。研究 I では、小学校から

のプログラム実施や複数校種を視野に入れたプログラム編成等が明らかとなった。研究 II では、A 小学校で SEL-8S を試行し、継続的な授業実践と教師へのサポートの必要が示唆された。研究 III では、組織づくり、職員研修の充実等、6 つの取組を行った。その結果、3 校で確実なプログラム実践が行われるとともに、A 小学校では明確な効果が、B・C 小学校では来年度以降の変容への期待が見られた。

研究 III における職員研修③の実施後、参加した教師から「環境も子どもの質も似ており、4 校とも課題が同じである」「小学生の課題は中学生の課題でもある。地域を巻き込んだ校区事業にしたい」等の感想が出された。3 校でプログラムの共同実施を行い、中学校も含めて研修会や授業公開を行ったことで、多くの教師が共同実施の意義を感じ得たことは本研究の成果である。また、北九州市では小中連携サポーター等を活用して小中連携の充実に努めている。同じく市の事業である北九州子どもつながりプログラムを小中連携事業に位置づけることで、効果的な小中連携が図れるであろう。さらに、義務教育学校の新設に見られるように、小中 9 年間を見通した教育の推進はわが国の中心的な教育施策の一つである。品川区(教育特区)では小中一貫教育を推進し、「市民科」を創設して人間関係形成能力や社会的判断・行動能力等の育成に努めている。このような取組により、自治体レベルで児童・生徒の社会的能力の向上が見られるようになってきた。本研究の SEL-8S 共同実施も、継続することで明確な成果を生み出していくであろう。

児童・生徒の心身の安定と学力の向上を図るためには、一人一人の児童・生徒に適切な社会的能力を身に付けさせることが不可欠である。小中の 9 年間にわたってより効果的に SEL-8S を実施することができるよう、今後も研究を推進していきたい。

主な引用文献

- 泉徳明・小泉令三 2015 教育委員会等のホームページで公開されている社会性と情動の学習プログラム等の分析 福岡教育大学紀要, 65(5), 1-8
 小泉令三 2011 社会性と情動の学習(SEL-8S)の導入と実践 ミネルヴァ書房
 松浦善満・中川崇 1998 子どもの新しい変化(「荒れ」と教職に関する研究 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 8, 1-10

謝辞

本研究にあたり、機会を提供して下さった北九州市教育委員会、在籍校および校区小中学校の校長先生方を始め、関係の先生方には多大なるご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。